

令和 8 年 度
宮崎国際大学 教育学部
総合型選抜 I 型（第 1 回）

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、戦史・紛争史研究家の山崎^{やまざき}雅弘^{まさひろ}さんが、中高生に向けて、コロナ・パンデミック後の世界を生きていく上で必要となることについて述べたものです。山崎さんの意見を要約するとともに、それを踏まえた上で、非常事態に対応できる力を子どもたちに身につけさせるには、どのような教育が必要かについて、あなたの考えを具体的に述べなさい、

感染症の拡大という非常事態において、明らかになったことは、「誰も正解を知らない問題で、どんな風にして答えを探すか」ということの重要性です。

学校のテストと違い、予期せぬ非常事態には、あらかじめ用意された「正解」はありません。みんなで意見を交換しながら、いちばんましな答えを探していきます。

学校の先生は、すでに正解がある問題については効率よく教えてくれますが、答えのない問題、まだ誰も答えを知らない問題への「対処の仕方」や「対処するために必要な能力の高め方」を教えてくれる先生は、あまりいないと思います。

まだ答えがない問題への対応については、先生と生徒の立場は対等です。生徒の方が、先生よりも先に、現時点でいちばん良い答えを見つけられる可能性があります。そのためには、「誰も正解を知らない問題で、どんな風にして答えを探すか」という能力を、自分で高めておかななくてはなりません。

そんな能力を、どうやって高めるか。

まず、世の中を飛び交う情報の中から、有用な情報を選別する「目」を持つこと。

ネット上を眺めると、ある問題について、一見すると専門的に見える、ディテール(細部)の情報をすぐに見つけることができます。しかし、ここで注意しなくてはならないのは「細かい情報ほど正しい」というわけではない、という事実です。

細々とした情報がたくさん並んでいれば、それをそのまま鵜呑^{うの}みにして信じそうになりますが、そこでいったん立ち止まって「どこからどこに向けて発せられた情報なのか」や「事実の裏付けはバランスよくなされているか(特定の結論に誘導するために都合のいい事実だけを根拠にしていないか)」、「全体の一部分だけを切り取った情報ではないか」などの「^{しんぴようせい}信憑性(どの程度信用できるか)」を、確認する必要があります。

それは、食べ物を口に入れる前に「どこで作られた食品か」や「どんな原料が含まれているか」、「腐ったり有害物質が混じったりしていないか」を確認するのと同じです。

また、日本国内だけに目を向けるのではなく、よその国がその問題にどう対処しているのかという点にも、視線を向けることが有用です。

新型コロナウイルスへの対応では、韓国や台湾、中国などで「安全に素早く行える新しい検査方法」や「マスク不足にならないようにする販売システム」、「無人で消毒や料理の提供を行える機械」などが次々と発案・発明されました。そんな光景を見て、日本人が韓国や台

湾、中国の人々から学ぶべきことは、まず自分が「よいアイデアだ」ということを具体的な形にする姿勢です。

それが「正解」かどうかは、作って具体的な形にしてから、評価を待つのです。

あらかじめ用意された「正解」を、たくさん覚えることが「優秀」だというのは、いわば「知識ベースの勉強」です。しかし非常事態に対処するには、そんな勉強だけでは限界があります。そこで力を発揮するのが、物事をいろいろな角度から観察し、今までに知った事実と組み合わせて、全体の構造を考えるという「知性ベースの学び」です。

非常事態に「いちばんましな答え」を探し出し、それを実現するために、今までなかったものを発案・発明する。そのためには、「知識」だけでなく「知性」を高め、人が本来持つ想像力を羽ばたかせる必要があります。

(『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』所収 山崎雅弘「図太く、しぶとく、生きてゆけ
— 誰も正解を知らない問題にどう答えを出すか」による・一部省略がある)